

竹下節子著 「ローマ法王、二千年二六五代の系譜」中公文庫

中央公論社 2005年6月25日刊を読む

1. 老獅子ローマ・カトリックは、2000年の歴史の終わり近くになって、東欧の田舎の、占領ばかりされてきた不運な国からやってきた、したがって気迫とやる気に満ち夢を捨てていない男を法王の座に据えた。だから彼は、保守反動だ旧弊だと言われようとやはり、高いヴォルテージをもったヨーロッパの回春装置として働き、忍耐強く鉄のカーテンをひっぱってついに剥がしてしまった。
2. 一度彼が使命を果たすと、人々はもう以前ほど彼を必要としなくなった。彼の頑迷な「田舎臭さ」が人々の求める洗練と合わなくなったのかもしれない。けれども彼は世界を駆け巡って壇上で正論を叫び続けることをやめなかった。殺すな、傷つけるな、愛し合え、わかっているも、多く人は自分も傷つきながら他人を傷つけて生きているのだ。正論なんか聞きたくない。街頭の宣伝カーで迷惑な自論をぶつ人とどうちがうのか。
3. 彼も年をとった。けれども熱意は衰えなかった。自ら老いて苦しみながら、自己の利益を求めず、しかし頑ななまでに自分の意見は変えなかった。彼を見、彼の言うことを聞いていると、人は失いつつある何かの方を振り向かざるを得なかった。自分の生活に追われている人たちの間にたまに、正論を堂々と吐いて迷惑がられるピエロがいてもいい。だれかが、どこかで、いつも、殺すな、傷つけるな、愛し合え、と言いつつ続けている。安らぎは案外そんなところから来るのかもしれない。

P187 ~ 188

[ コメント ]

精神的支柱たるべき人の使命、あるべき姿をローマ法王に見ることができる。

- 2009年3月13日林明夫記 -